第 12 回「臺日文化交流教室」

講　題 / 演　題：

嘉南大圳的日本精神－八田與一的生命哲學

演講人 / 講演者：

八田修一（八田與一之孫、於 TOYOTA 汽車株式會社職務）

演講摘要：

在台灣的各位大概無人不知嘉南大圳與烏山頭水庫吧。

台灣一般將農業用儲水池稱埤、水道稱圳，灌溉設施統稱埤圳；據說嘉南大圳正因它作爲提供嘉南平原十五萬公頃農地的灌溉用水設施的規模宏大而得名。

此外，各位想必也知道台灣話裡「日本精神」一詞。不過就算問我們日本人，日本精神是什麼，很可能大部份日本人也都不太

講演摘要：

台湾人の皆様は、「嘉南大圳」、「烏山頭水庫」を知らない方はいらっしゃらないだろう。

台湾では、農業用貯水池を「埤」、用水路を「圳」、灌漑施設のことを通常「埤圳」と言うそうだが、嘉南平原15万ヘクタールに水を供給する灌漑施設があまりにも大規模であったため「嘉南大圳」と呼ばれたそうだ。

また台湾語にもなっている「日本精神」ですが皆さんはもちろんご存知だろう。しかし私たち日本人に「日本精神」と尋ねても多く

▲八田修一先生

▲來賓提問

第 12 回「台日文化交流教室」

2017.09.29

清楚這到底指的是什麼吧。其實我自己在十年前第一次聽到這個詞的時候也不太懂到底是什麼意思。當時，某位台灣人對我說：「什麼，你是日本人卻不知道日本精神嗎？」並且親切地教導我什麼是日本精神。那位台灣人正是各位也非常熟悉那位有名的……

後來，來自台灣的各位告訴我，日本精神就表現在八田與一建造的烏山頭水庫與灌溉設施上。今天我想和各位分享的是祖父八田與一在建造嘉南大圳的時候是如何去思考；又重視些什麼，以及從中，我在台灣人身上學到的日本精神。✦

の日本人は何のことかよくわからないと答えるだろう。実は私自身、10年前に初めてこの言葉を聞いたときに意味が良く分からなかった。その時、ある台湾人から「なんだ、君は日本人のくせに日本精神を知らないのか？」と言われ、教えていただいた。その台湾人とは、皆様もよくご存じの有名な･･･

▲來賓提問

その後、台湾の方々からは「日本精神」が八田與一の作った烏山頭ダムや灌漑施設に息づいていると教えられた。本日は祖父八田與一が何を思い、何を大切に考えて「嘉南大圳」を建設したのかを通じて私が台湾人から学んだ「日本精神」をお話させていただく。✦

第 13 回「臺日文化交流教室」

講　題 / 演　題：
從我的日語邂逅漫談台日文化

演講人 / 講演者：
張文芳（友愛會代表）

演講摘要：

我的人生路上最重要的邂逅，莫過與日語的相遇。或著該說，與日本的邂逅會更加適合。即使說這型塑了我這個人也不爲過。這也是理所當然，因爲我從小學到舊制中學四年級這段時間的求學歷程都接受日語教育。

運氣很不好地，在人成長過程中發育最盛、食慾也最旺盛的青少年時期正好進入二十世紀最大的戰爭時期，一切以軍需優先的日本社會把食物、衣物、日用品等物資全

▲友愛會贈與本中心機關誌

講演摘要：

私の人生途上において最も重要な「邂逅」は日本語でした。というよりも日本との邂逅と言った方が適切だと思う。これが私の人間形成の要素と表現しても過言ではなかった。それもその筈、小学校から旧制中学4年間の求学は日本語だったからだ。

▲張文芳先生

人間として最も発育・食欲の旺盛な青少年期は、不運にも二十世紀最大の戦争時代に入り、軍需優先の日本社会は食料・衣料・日用品などの物資全般に配給制度が敷かれ、急激に物資不足となり、餓死とまではゆかないが、極端な欠乏生活を終戦の1945年まで強制されるのであった。その間の体験を語る。

第 13 回「台日文化交流教室」

2017.12.15

部改採配給制度，民間很快地各種物資缺乏，雖不致餓死，但直到 1945 年終戰前都是被迫過著極端的貧困生活。本次講演也談及了這段時間的經驗。

我出生時是日本人，很自然地幼少期都是以日語度過，但終戰後的台灣情勢使我不得不再學習台灣話與北京話，鍛鍊三種語言的能力。戰後回到台灣，一開始先在中學、高中先擔任書記一職，一年三個月後服中華民國初次實行的義務兵役，在軍隊生活中和中國話「邂逅」，這次經驗成爲學習在此後生涯中不可或缺的中國話的機會。

然後就是與「友愛會」邂逅。因爲加入這個會的緣分，得以重新好好學習日語。更重要的是因此和許多的台日人士交流，獲得了數不清的友誼緣分。

本次演講也是友愛會牽引的緣分讓我們得以邂逅。友愛會是我們生涯學習的場所，也是和人群交流的據點。✦

▲來賓提問

私は日本人として生まれ、先ず日本語で青少年期を過ごし、終戦後は台湾で台湾語と北京語を使用という三つの言語の習得を余儀なく強いられた。戦後は台湾に帰還するが、最初の仕事は中学・高校で書記として就職、15ヶ月後には中華民国最初の義務兵役に服役、軍隊生活で中国語と「邂逅」、この体験がその後の人生に欠かせない中国語を会得する機会となった。

そして「友愛グループ」との邂逅。このグループに入会したお陰で日本語を改めて学習できた。そしてより多くの台日の人々と数え切れないほどの人数の友人を得ることが出来た。

今日の講演会も友愛グループの存在がもたらしてくれた邂逅の一つだ。友愛グループは私たちの生涯学習の場でもあり、多くの人々との交流の場でもある。✦

第 14 回「臺日文化交流教室」

講　題 / 演　題：
從採訪中看見「龜毛」的日本人

演講人 / 講演者：
乃南アサ（直木賞作家）

演講摘要：

臺灣不但地緣上與日本接近，爬梳其歷史更可感受臺灣與日本的特殊關係。今日有許多日本人無論對臺灣與日本過往的關係或臺灣一路走來的歷史都一無所知地來臺觀光或洽公，但無論是多麼匆忙的行程，只要來到臺灣必然會有種不可思議的感覺油然而生。如果用一句話來形容，我想會是「初次造訪卻又令人懷念」這樣的親近感吧。

講演摘要：

台湾は地理的に近いばかりでなく、歴史をひもといてみても、日本とは特別な間柄にある存在だ。今現在、そんな台湾と日本との過去の関係や、その後の台湾が歩んできた道を知らないままで観光に、またビジネスにと訪れる日本人は少なくないようだが、たとえ駆け足の観光でも一度、台湾に来れば必ず何か不思議な思いにとらわれるはずだ。それは、ひと言でいえば「初めてなのに懐かしい」という近しい感じのだろうか。

▲乃南アサ女士

▲學生提問

第 14 回「台日文化交流教室」

2018.03.09

不可或忘的是，2011 年 3 月 11 日東日本大地震時，臺灣的一般市民大衆募集了高達兩百億日幣的捐款援助日本。當時應該有許多日本人重新感受到臺灣是如此親近的存在吧。

雖然臺灣與日本在亞洲的地理位置如此接近，乍看之下又是如此相似，但實際上愈頻繁造訪愈能感受到彼此的不同之處。這既是對臺灣的發現，同時也是一面映照出日本人樣貌的鏡子。而我們日本人對此時而感到煩躁，時而深思或煩惱。這次，打算與各位談談我們日本人所懷抱的那份「龜毛」的心情。✦

忘れてならないのは2011年3月11日に起きた東日本大震災に際して、台湾の方が200億円もの義援金を市民レベルで集めて下さったことだ。あの時に多くの日本人が改めて、台湾をより身近に感じたはずだ。

▲學生提問

このようにアジアの中でも近しい存在であり、一見よく似て見える台湾と日本だが、実は、来れば来るほどそれぞれの違いを感じるようになってきた。それは台湾の発見であり、そのまま合わせ鏡のように日本人を知るということでもある。そこで私たち日本人は苛立ち、考えさせられ、悩む。今回は、そんな日本人が抱える「ややこしさ」について、お話ししようと思う。✦

第 15 回「臺日文化交流教室」

講　題 / 演　題：

透過「アリガト謝謝」觀察台灣人與日本人之間的距離

演講人 / 講演者：

木下諄一（台北文學獎作家）

演講摘要：

在東日本大地震之後，超過 200 億日圓的捐款由台灣捐贈至日本災區。當中，由台灣政府捐贈的金額大約一成左右。換言之，這些捐款幾乎都是由台灣國民用自己的薪水或是零用錢自願樂捐的。簡單計算一下的話，台灣人民平均一人就捐贈了 800 日圓。捐款的集資速度遠遠超乎想像，就有如全國性的特別活動一樣。

講演摘要：

東日本大震災のあと、台湾は被災地に200億円を超える義援金を送った。このうち政府によるものは一割ちょっと。言い換えれば、ほとんどは国民が給料やお小遣いの中から自分の意志で出したものだ。この数字は単純に計算してひとり当たり約800円。義援金が集まっていく様はまさに想像を遥かに絶する国を挙げての特別なイベントのようだ。

▲木下諄一先生

▲林立萍教授

第 15 回「台日文化交流教室」

2018.06.08

《アリガト謝謝》這本書就是以在地的視角來描寫前述過程的小說。這次的演講者將由作者木下諄一根據執筆小說時的採訪內容、以及長達 30 年在台經驗的所感，爲聽衆講述「爲什麼台灣人能夠集資這麼多的捐款呢？」的原因。同時也將介紹書中所未提到的軼事。

另外，將更進一步藉由「台灣人和日本人的距離」這樣的議題，來探討台灣戒嚴時代到現今台灣人和日本人之間的關係。「台灣人和日本人的距離」是平常不太會考慮到的問題，但現在應該要重新思考現狀，並由此探討台日之間的關係該如何發展下去。✦

▲來賓提問

この過程を現地視点で描いた小説「アリガト謝謝」。今回の講演では作者の木下諄一が執筆に当たっての取材や30年にわたる在台経験を通して感じたことをもとに、「どうしてこんなに多くのお金が集まったのか」についてお話する。このほかにも作品の中に書いていないことも紹介する予定だ。

そしてもうひとつ、そこからさらに一歩踏み込んで、「台湾人と日本人の距離」というテーマで戒厳令時代から今日に至るまでの台湾人と日本人の関係についても取り上げる。普段あまり考えることのない双方の距離という問題について、もう一度現状を見つめ直し、そこから今後の日台関係をどのように発展させていくべきかをお話する。✦